ミンガラバー こんにちは

Myanmar-Japan Collaboration Project for Fostering Medical Human Resources

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL：086-224-0102
FAX：086-221-2554
URL：http://www.mjcp.or.jp

巣立つ20人 輝いて

補助助産師 1期生 研修終える

あかね基金

無医療に近いミャンマーの農村。そこで働く補助助産師を育てるために、協会の西山央子理事が設けた奨学金制度「あかね基金」の奨学金で研修を受けた1期生20人の終了式が10月7日、ヤンゴンで催された。西山理事や知人、それに岡田茂理事長、小出典男副理事長ら9人が出席、門出を祝った。

終了式の翌日、西山堅母子センターを見学し、教官から話を聞く補助助産師たち＝ヤンゴン郊外

研修生はヤンゴンから車で約4時間かかるエーヤワディ管区の総合病院で、半年間、寮生活を送りながら研修を受けた。ミャンマーで助産師の資格を取るには2年間、研修を受けなければならないが、補助助産師は半年でよい。

研修費用などは、西山理事の出資と会員に呼びかけた募金を合わせた同基金で負担した。

ヤンゴンのホテルで行われた研修終了式は研修生にとって“卒業旅行”でもあり、これらの費用も同基金でまかなった。

翌日には、ヤンゴン郊外の協会員寄付クリニック「西山堅母子センター」を見学。ここでは助産師教育が行われており、その教官から話を聞いた。

5年間に100人

1期生は自分の出身地の農村などに帰り、補助助産師としてすでに活動している。同基金では向こう5年間、毎年20人ずつの補助助産師を育成することにしている。

ひとりでも多くの命を

協会理事 西山 央子

協会の活動を長く続ける中で、ミャンマーの医療の悲惨な現状を目の当たりにしたり、支援を求める現場の声が耳に届いたりするたびに、私は、何か自分にできることはないだろうかと模索してきました。そして、たどり着いたのが「あかね基金」です。

ミャンマーの貧しい農村地域では、人々は医療を受けることさえできません。乳幼児の死亡率は非常に高く、日本なら当然救われる多くの命があっけなく失われています。

そうした状況の中、志のある若い人たちが医療の仕事を目指そうとしても、経済的に困難であるという厳しい現実が立ちはだかります。「あかね基金」は、農村地域で働く補助助産師の教育をするための奨学制度です。ミャンマーの母子たちが少しでも安心して、健やかに暮らせるように手助けをしたいと思っても、私自身が現地で直接携わることはできません。「ひとりでも多くの母子たちの命を救いたい」。こんな願いや想いを託したのです。

理想は掲げたものの不安な気持ちもありましたが、無事、1期生を送り出すことができました。研修終了式の席で、彼女たち一人ひとりの希望に満ちた明るい表情を眺めているうちに、自分自身が選択した道が決して間違っていなかったのだと、胸が熱くなりました。

すでに1期生たちは出身地に帰り、補助助産師としての第一歩を踏み出しています。小さな芽がやがて大きな葉となり、いつか花を咲かせるように、「あかね基金」はミャンマーの人たちの未来の幸せにつながっていく、と信じています。

基金の趣旨に、多くの会員の皆さまをはじめ企業・団体などが賛同していただき、多額の協力金が寄せられています。ご協力に改めて深く感謝すると共に、今後も引き続きご支援くださいますようお願いいたします。

乳がん検診の成果発表

セミナー 協会支援のセンター医師

セミナーで熱心に意見を交わす参加者＝ヤンゴン

ミャンマー国民健康財団が主催する「乳がん検診セミナー」が10月5日、ヤンゴンであった。この国の女性のがんでは、乳がんは子宮頸がんと並んで死亡率が一番高いのに、早期発見、治療体制はできていなかった。協会などの支援でやっと2か所に検診センターが設けられ、その成果が徐々にあがっていることが今回初めてのセミナー開催につながった。

検診センターは2013年12月、ヤンゴンにオープンしたのが最初。次いで15年2月、マンダレーに2番目ができた。どちらも協会と医療コンサルティング会社メディヴァ（東京）、経産省などの支援で完成した。検診医師らは岡山大学病院などで研修を受けた。

セミナーには協会の岡田茂理事長、岡山大学病院の枝園忠彦医師、水島協同病院（倉敷）の石部洋一外科部長やメディヴァ、JETRO（日本貿易振興会）、フジフイルムメディカル（東京）などの関係者が助言者として出席。ヤンゴンの検診センター医師は、開設からほぼ1年半の間に、乳がんを心配する約800人から1割以上の異常を見つけたことなどを報告。マンダレーの医師は、検診を充実するためには各地にセンターの開設が必要と話した。

保健省も検診へ 2カ所で始める

ミャンマー保健省も協会支援などでできた両センターの実績から、独自に乳がん検診に乗り出した。北部のマグエーの総合病院とヤンゴン郊外のサンピア総合病院の2か所にマンモグラフィー（乳房X線撮影）装置を設置、来年から検診を始める。この検診にあたる医師や技師の研修は岡山大学病院で行う。

岡田理事長 ジャカルタで講演

ASEANフォーラム

ファーラムで講演する岡田茂理事長＝ジャカルタ

ジャカルタで8月25日、「日本・ASEAN（東南アジア諸国連合）健康フォーラム」が催され、協会の岡田茂理事長がインドネシア政府から招かれて講演した。

講演内容は、ミャンマーでの乳がん検診について。協会が支援して2か所に検診センターを設け、同国で初めて乳がん検診を進めてきた経過と実績などについて説明した。

フォーラムにはASEAN加盟のタイ、ベトナム、フィリピンなどの医師らも大勢参加しており、岡田理事長はこれらの国々に対して、「東南アジアでも乳がん死亡が多いので、この日本式の検診システムを参考にして欲しい」と話した。

働き蜂、家族生活どうなってるの？

印象記

岡山大病院で研修のイーティンザーウィン医師（ヤンゴン総合病院）

この秋、協会の招きでミャンマーから4人が研修のため岡山にやってきた。医師、臨床検査技師2人、それに臨床工学士。3か月間、岡山大学病院で指導を受けている。形成外科で研修中の医師の、岡山の印象も交えた報告です。

顕微鏡を使っての手術研修＝岡山大学病院形成外科教室

日本の土を踏むと同時にまず感じたのは寒さでした。ミャンマーとは全く異なった感覚。でも私は寒さが好きなので嬉しかった。岡山大学の形成外科教室に着くと、皆さんが温かく私を迎えて下さり、初日は大変スムーズに事が運びました。

大学病院は広い敷地に、多くの専門科、診断センター、研究室、手術室、図書館、リクレーション施設、レストランなどがある。どこも最新の機器を十分に備えており、清潔でした。

私の宿舎は病院から自転車で15分位の所にある協会事務所の4階。広いとはいえないが、綺麗で温かい。私はミャンマーでは自転車に乗ることに慣れていなかったし、最初は宿舎から大学病院への道を覚えていなかったので、道に迷い、40分位かかった。会った人に何度も道を尋ねました。どの人も微笑みながら、親切に、優しく、直ちに助けてくれました。

もう一つ日本人の特徴は、「働き蜂」だということ。みんな仕事に忙しく、遅くまで働いているが、疲れているようには見えない。皆さん、ほとんどの時間を仕事に使っているので、家族との生活はどうなっているのか不思議でたまらない。

研修の最初は顕微鏡を使っての手術。鳥の羽の血管の縫い合わせからスタートし、動物の最後はラットの血管の縫い合わせ。このような小さくて可愛い動物を犠牲にする経験は私にとっては初めてで、悲劇としか言いようがない。私は可哀そうに思い、いつも祈っていました。彼らの犠牲と命は決して無駄にしないと約束しながら。そして、この技術を使って人々の命を救うことが出来るのだから動物たちも私を許して下さい、と願っていました。この悲劇を除くと、研修の設備、指導は完全でした。

今の世の中は、技術力が人々の生命に影響している。国全体の技術力が進めば、古いやり方は消えてゆく。しかし、岡山では必ずしもそうではありません。ここでは技術力と昔からの文化はよく釣り合って存在しています。これを見て、技術力、文化、生活習慣のバランスにより、日本人は平和で気持ちの良い生活を楽しんでいると思いました。だから、日本は世界で最も犯罪の少ない国なのです。

私の考えをまとめると、岡山は「働き蜂」の多い、愛すべき、親切な、優しい人々にあふれた美しい町です。技術力と伝統のバランスがとれた町でもあります。日本人は安全さとか国の発展にはあまり尊敬の念を持っていないようですが、ミャンマー人の私からみれば恐れ多いことです。

ヤンゴン第二医大学長（中央）、ヤンゴン看護大学長（右）から、岡山大の森田学長に宝石画が贈られた＝岡山大学長室

学生交換協定結ぶ

岡山大とヤンゴン第二医大ヤンゴン看護大

ヤンゴン第一医科大学のゾーウェイソゥ学長、ヤンゴン看護大学のミャッタンダー学長、それにマグエー医科大学の教授やミャンマー保健省幹部らが10月18日から21日まで岡山を訪問。両学長と岡山大学の森田潔学長との間で医学生、看護学生の交換協定を結んだ。

来年4月にはミャンマーから医学生8人が交換学生として岡山大学に来る。このうち4人については協会が旅費を負担する。この学生交流は今後も続けるという。

食品・薬品規制担当の人材育成

岡山大薬学部協力

ミャンマー保健省の食品・医薬品規制局部長と同副部長らが10月下旬、岡山を訪れた。岡山大学薬学部の檜垣和孝薬学部長に人材育成への協力を申し入れ、同学部長も協力を約束した。

ミャンマーでは食品や医薬品、化粧品などをチェックする体制が遅れ、担当の人材も少ない。

現在、岡山大学薬学部博士課程に1人が留学している。同薬学部では、来年から受け入れを増やす検討をする。

協会だより

支援募金に50万円

大洪水　被災地へ浄化剤

ミャンマー大洪水被害の支援のため協会が呼びかけた募金に、会員らから約50万円が寄せられた。

大洪水は7月から10月初めにかけて起こり、全国で数十万人が被災。国連や各国の団体から支援の手が差し伸べられた。

協会では現地からの要請に基づいて10月、泥水を飲料水に浄化する薬剤20万円分を届けた。

残り30万円については、いつも氾濫被害にあうヤンゴン西部のエーヤワディ管区の村に浄水施設を設ける予定。

車いす30台贈る

シャン州へ　京都東ロータリー

協会を通してミャンマーに車いす贈り続けている京都東ロータリークラブが10月11日、新たに30台を寄贈した。これで通算6回目、計110台となった。

ヤンゴンから飛行機で1時間、観光地で有名なインレー湖近くのタウンジーで行われた贈呈式には、小池薫会長（京都大学教授＝救急医療）ら同ロータリークラブから7人が出席し、ミャンマー国民健康財団のタンセイン会長に託した。同財団はシャン州の保健所や医院に分配した。

贈呈後、国民健康財団から記念品が小池会長に贈られた＝タウンジー

心音計寄付託す

10月に訪問　急逝の丹羽さん

10月上旬に岡田理事長らに同行してミャンマーを訪れた前岡山県医師会長の丹羽国泰さん(74)が11月16日亡くなった。

初めてミャンマーの医療事情に触れた産婦人科医の丹羽さんは、帰国後、胎児の心音をはっきり聞くことができるドップラー心音計と血圧計の寄付を協会に託していた。協会では1月に届け、助産師教育に使ってもらう。

編集後記

半世紀以上続いた国軍中心の政治に終止符を打ったのだから、政変とはこのことでしょう。ミャンマーの総選挙でアウンサンスーチーさん率いる政党が圧勝。日本にも新聞やテレビを通じ、人々の熱気が伝わってきました▼しかし、直面する課題は山積のようです。スーチーさんは大統領になれないし、行政経験のある党幹部はほとんどいない。軍との関係はどうなるのか▼新年早々、岡田理事長や岡山大学病院の医師らがミャンマーへ出かけ、また新政権が発足する3月に訪問予定がある。この国がどう変わろうとしているのか、直接見聞したことを次号に寄稿してもらいます。（西﨑）